



昼食づくり



ふれあい農園での作業風景



相談員の打ち合わせ



津山市教育相談センター 「鶴山塾」

子どもたちと歩んだ30年

台所のある教育相談室
鶴山塾に通う子どもの中には、生活体験が少ない子どもも多くいます。その中で、鶴山塾では、子どもの生活体験を豊かなものにしていくことは、子どもの成長のために大切なことだと考えています。また、できるだけ家庭に近い雰囲気大切にしながら、子どもたちと関わりを持ちたいと考えています。

そこで、農作業体験の場「ふれあい農園」を造り、野菜作りをしています。この農園で、子どもたちは地域のひとと一緒に、野菜の種や苗を植え、収穫を体験します。

さらに、収穫した野菜を中心にした昼食を、子どもたちと一緒に作っています。

台所は、家庭の中でも、子どもが親に何か聞いてほしい時に、話し掛けやすい場所だと思っています。

鶴山塾でも、台所では、調理台を囲み、会話をしながら調理をしたり、味付けを相談したりする場になっています。

また、みんなで食事をする中で、おしゃべりが楽しいと思えたり、人や食べ物への感謝の気持ちも生まれたりするようになっています。

このように農園作業や昼食づくり、食事など、さまざまな生活の一部を共有していることから「**台所のある教育相談室**」と呼ばれ、鶴山塾の特徴となっています。

鶴山公園の一角に大正時代の面影を今も残し、古木と苔庭に囲まれた、津山市教育相談センター「鶴山塾」があります。

子どもたちの幸せを願う多くの人に支えられ、子どもたちとともに悩み、考えながら歩んできた鶴山塾は、開塾30周年を迎えました。

30年の歩み

鶴山塾の取り組み

昭和 50年代、全国的に校内暴力や少年非行、登校拒否などが社会問題となり、津山市も同様の問題を抱えていました。

市は「教育問題は学校だけが抱える問題ではない」「まちづくりは人づくりから」という発想のもと、行政や保護者、教育関係者、市民が一体となって、鶴山塾を開塾しました。

そして、悩みや課題を解決できず、登校拒否や引きこもり、暴言や暴力などで自分の思いを表現しようとする子どもたちの支援を行いました。

当時は、学校へのカウンセラーの配置などはまだ無く、全国的に見ても画期的で先進的な取り組みでした。

30年変わらぬ姿勢

開塾 から30年が経ち、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化してきています。そして、子どもたちの抱える問題は多様化・複雑化してきています。

そんな中、鶴山塾では、開塾当時

と変わらず「**治そうとするより、わかってせよ**」を基本姿勢として、大人の思いを無理やり子どもに押し付けることなく、子どもの思いに寄り添い、理解しようとする取り組みを行っています。

相談員との信頼関係

相談 を受ける相談員は、まず、悩みを持つ子どものあるがままの状態を受け入れます。そして、子どもとの二者関係づくりの時間を大切にし、家でも学校でもない「ホッ」とできる「**こころの居場所**」になれるように信頼関係を築けるよう、努力しています。

そうする中で、次第に子どもたちは、こころの中にある不安や不信感を少しずつ相談員に話していけるようになり、一緒に今後のことも考えていけるようになります。そして、自分の足で前に踏み出す力を身に付けられるようになっていきます。

鶴山塾のあゆみ

年・月	できごと
昭和 59年10月	津山市教育相談センター「鶴山塾」設立
60年6月	「ボランティア通信第1号」を発行 教育相談電話「津山こころの電話」を設置
61年7月	「相談協力員連絡会」が発足
63年1月	小冊子「子どもとともに歩む『鶴山塾』」を発行
2月	相談室・学習室・箱庭の部屋を増築
12月	「教育相談だより第1号」を発行 (以後、年1～2回発行)
平成 元年10月	「小・中学校教職員研修会」を開催(以後、毎年開催)
2年6月	「ふれあい農園」を開塾 文部省の「登校拒否児童・生徒の適応指導教室の在り方に関する調査研究」を実施
3年8月	「相談協力員連絡会」を「とまり木の会」へ改称
11年4月	文部省の「不登校児童生徒の適応指導総合調査研究」を実施
13年6月	「休日相談月間」(6・10・2月)を実施
18年10月	「全国適応指導教室連絡協議会」近畿・中国地域会議で活動報告
26年10月	開塾30周年を迎える



開塾30周年記念式典



開塾の様子